

# 孤独とミソジニー

——岡田利規演出『友達』——

北村紗衣

2008年11月11日から24日にかけて世田谷のシアタートラムで上演され、引き続き27日と28日にまつもと市民芸術館でも公演が行われた『友達』は、安部公房が1967年に発表した戯曲を劇団「チェルフィッチュ」の主宰者である岡田利規が演出した舞台である。常に自作の戯曲を演出してきた岡田はこれ以前に既成の作品の演出を手がけたことはなく、また自らの劇団を離れて様々なジャンルの役者たちと組むのも今回が初めての試みであった。

『友達』は、小林十市演じる若い男が1人で住んでいる古いアパートの一室に、ある日突然見知らぬ9人家族が押しかけてくるところから始まる。この家族は「一人ぼっちはいけない」と言って男と同居することを主張し、どんなに男が抗っても全く気にせずに善意を押しつけ、最後にはそれがエスカレートして結局男を殺してしまう。主人公の男が孤独を愛する人物であるのに対して、この家族が押しつけがましい「世間」を象徴しているのは明らかであり、『友達』はこの二つの対立がはっきりと描かれた非常にわかりやすい寓話であると言ってよいであろう。

このあまりにも「わかりやすい」構図ゆえに、『友達』は演出の手法によっては単なる図式的な芝居になってしまう危険性を秘めているとも言える。しかしながら岡田利規の演出においては、登場人物を直接観客に話しかけさせることにより、芝居が陳腐なものになることを防ごうとしている。2008年の11月9日に日経新聞に掲載されたインタビュー記事によると、岡田は「観客が男にではなく家族に肩入れするようにデザインしてみせる」ことを目指していたという。

観客を家族の共犯者にさせようという試みは、役者陣の奮闘もあってある程度成功していると言ってよいであろう。しかしながらインタビューにおいて岡田があげている「見知らぬ誰かに暴力をふるう『世間』としての側面が自分にあることを自覚して」もらうという目的が、今回の公演においてどの程度実現されているかについてはいささか疑問がある。本公演においては、観客の一部を家族の側に引き込むことには成功しているものの、それによって観客の側に

自らも暴力的な「世間」になりうるのだという共通認識を作り上げるまでには至っていないように思われる。その理由は、今回の演出においては女優陣に比較的重点が置かれており、それゆえにこの戯曲に潜んでいるミソジニーが色濃く舞台に表出してきているからだ。おそらく今回の『友達』においては、観客の性別や個人的状況が、どの程度「家族」の側に寄って芝居を見られるかという点に強い影響を及ぼしているのではないかとと思われる。

今回の『友達』の特徴は、出てくる女性たちが徹底して「美人」として描かれていることだ。男の家に押しかけてくる家族には木野花演じる母親の他に3人の娘がおり、また男には別に婚約者がいるという設定で、この芝居には総勢4人の若い女性が登場する。新潮文庫から発行されている原作の登場人物紹介によると、婚約者は都会風の娘ということになっており、ある程度洗練された容姿の持ち主であることがほのめかされているが、押しかけてくる家族の娘たちは皆あまり容姿に関してはぱっとしない印象がある。長女は30歳の「男におそわれる夢を持ちつづけているオールドミス」だ。次女は清楚ではあるが、姉から「薄気味の悪い子」と言われるような暗い娘である。末娘は「見かけによらぬ小悪魔」ということで、幼いが悪知恵の働く少女という設定である。ところが今回の『友達』においては、この3人は揃いも揃って美しい女性であることが強調されている。剣持たまき演じる長女は色鮮やかなワンピースとヒールの高いブーツに身を包んだグラマーな女性であり、「オールドミス」どころか、ラスト近くで口にする「男女の仲って、そういうものじゃないの」という台詞からは恋愛経験が豊富な女性としての余裕すら感じられる。それに対してともさと衣演じる次女はかかとの低い靴を履き、落ち着いた色のスカートをはいた家庭的な愛らしい娘であり、原作ほど暗い印象はない。呉キリコ演じる末娘はセーラー服に黒い靴を履きたいわゆるロリータ風の美少女である。塩田倫演じる婚約者のほうも負けてはおらず、抜群のスタイルを赤いコートで包んで登場し、セピア色の照明の中でベンチに座って主人公を待つ場面はまるで映画のようだ。

今回の舞台では、この美しく一見虫も殺さぬように見える女性たちが、最も怖ろしい存在、「世間」が男に対して及ぼす脅威の象徴として描かれている。家族のメンバーである女たちは、原作に比べてよりわかりやすい形で男の生活を圧迫し、管理しようとする。最もはっきりとした形で男を圧迫するのは、男の金を巻き上げて無理矢理に財政管理を始めてしまう家族の母親である。一方、娘たちはより陰湿に、自らの性的魅力を利用しつつ男の生活を脅かす。一見幼い末娘は、冒頭の場面で主人公が呼んだ警官をほとんど台詞も口にせずに色仕

掛けで撃退してしまうが、これは原作にはない演出である。また、原作では「オールドミス」であまり男と恋愛をした経験もない長女が男に一方向的に執着して一緒に逃げようとし、それに嫉妬した次女が2人の秘密を暴いて男を殺害するという構図になっている。しかしながら今回の舞台においては長女も次女も美しい女性として描かれているため、彼女たちのほうから男に惹かれていったというよりはむしろ主人公の男のほうが女たちの魅力にまいてしまっているという印象が強い。男はまずは魅力的な長女を誘惑して逃げようとし、それが失敗すると次は家庭的な次女を籠絡して懐柔しようとするが、結局この作戦も失敗し、男は女たちから手痛いしっぺ返しを食らうことになる。

主人公の男の生活を脅かすのは家族の女たちだけではない。男を長年知っており、愛しているはずの婚約者も結局は男を裏切って逃げてしまう。彼女の心変わりの直接の原因は、家族の長男に「彼、あらゆる共同生活に、極端な偏見をいんでいるらしいんだ」と言われたことである。婚約者は男と同じ職場で働いて自活している女性であり、お節介やきの家族に比べればはるかに主人公の男に近い個人主義的な価値観を持っている人物のように見える。しかしながら実際のところ、彼女は心の中では「共同生活」を望んでおり、孤独を愛する主人公が本当に家庭を築くのに向いているのか疑っている。ゆえに彼女は自らの恋人である主人公の男の言葉よりも、初対面の家族の言うことを信じてしまう。婚約者が家族の価値観に共鳴し、男を裏切るという筋立ては、この芝居にこめられた男女関係に対する絶望を浮き彫りにしていると言えるであろう。『友達』において、女は皆共同生活を望んでおり、孤独を愛する男たちに対して常に脅威を与える存在である。家庭を望む女とそれを望まない男の間には深い断絶がある。

最後の場面では、最も家庭的な性格であるはずの次女が全くあっけらかんとした様子で、毒入りの牛乳を用いて男を殺害する。檻に閉じこめられて何も知らずに牛乳を飲み干す男は、まるで母親の子宮の中でこの世に生まれ出ないうちに死んでしまう赤ん坊のようであり、家庭的な次女が提供する白い牛乳は母乳を連想させる。主人公の男が牛の模様のパジャマを着て登場し、子供っぽい口調で婚約者に電話をかける場面から始まる今回の『友達』が、毒入り牛乳による主人公殺しで終わっているということは示唆的だ。この『友達』においては、最初から最後まで、主人公の男の後ろには母親的な権力を背負った女たちに象徴される「家庭」の影がちらついている。男は家庭によって気楽な一人暮らしを奪われ、女たちによって包み込まれ、窒息死させられるのである。

『友達』という戯曲は、一見したところでは押しつけがましい「世間」の暴力と、それに脅かされる人間という、誰でも思い当たるようなある種「普遍的」なテーマを描いているように見える。しかしながら実際のところ、この戯曲は家庭という共同生活を求める女に脅威を感じている女嫌いな男の物語という側面をも有しているのではないだろうか。そう考えると、観客に向かって話しかけたり、微笑みかけたりする女たちを見る者がどう受け取るかは、当人の性別や個人的な状況によって異なってくるであろう。女たちに代表される家族に強い脅威を感じる観客がいる一方で、むしろ家庭を求める女たちと自らを重ね合わせ、非社会的な男が殺されてしまう場面に溜飲を下げる観客すらいるかもしれない。一般化は危険であるが、現代の日本においてひきこもりの大多数が男性によって占められていることや、しばしば男性の内向性がミソジニーと結びつけられて語られていることを考えると、今回の『友達』においては、どちらかというとも男性の観客よりも女性の観客のほうが「家族」の側に視点を置いて見るのができたかもしれない。

岡田利規演出の『友達』は、本来戯曲に潜んでいた男女間の深い断絶というモチーフを顕在化させているという点において、非常に刺激的な舞台であると言ってよいであろう。しかしながら、こうした断絶をどう乗り越えるかという解決策は『友達』には示されていない。この芝居は主人公の男を殺した家族が新たな滞在先を探して旅立っていく場面で終わり、女たちがひたすら男を家庭に囲い込み続けるであろうことが暗示される。家庭を求める女と孤独を求める男の間の断絶は、深まる一方で全く改善の兆しすら見せないのである。